

東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会 議事録

日 時 令和5年3月23日（木）13：30～15：30

場 所 伝承館研修室

出席者 別紙出席者名簿のとおり

内 容

1 館長挨拶

2 委員自己紹介

（別紙資料1による開催趣旨等の説明の後、委員による自己紹介）

3 議題（座長：小沢委員）

（1）調査・研究部門部会実施報告

（川崎委員（調査・研究専門部会長）から報告）

（2）今年度の運営及び活動実績

（事務局が別紙資料2に基づき、令和4年度の事業実績の説明）

（3）前年度懇談会でのご意見への対応

（事務局が別紙資料3に基づき、令和3年度有識者懇談会でのご意見と対応状況の説明）

（4）来館者アンケート結果

（事務局が別紙資料4に基づき、一般来館者回答概要の説明）

（5）来年度の主な事業計画

（事務局が別紙資料5に基づき、令和5年度事業計画の概要の説明）

（6）意見交換

以下のとおり

【小沢委員】

いろいろな形で多くの事業が行われておりますのでごくボリューム感のあるご報告だったなと思っています。ここからは事務局の説明に対してまた委員の皆さんのこれまでの取り組みというようなことも含めて感じてこられたことをお互いに意見交換もしくはご提案をいただきたいと思っていますところです。大きく分けまして運営やその展示内容に関わること、またこれから先の伝承館また新年度において新たな事業も構想されていることでありますので、そういうようなことも含めてご意見をいただければと思います。

【川崎委員】

2点あります。

1点は今年度の実績ということで非常に盛りだくさんで特に高村館長を始めとする皆さん方の精力的な活動の様子があったんですけれども、あれもこれも忙しすぎて体壊さないのかというのがちょっと心配になって、特に館長がいろいろ頑張っているということがひしひしと伝わってきたんですけれどもそれが気になったということです。

それに若干関連するのですが、2点目は私、毎年東日本大震災の追悼式に出席させていただい

ているんですけれども、今年度の追悼式で会津高校の男の子1人、女の子2人が若者の言葉というところで発表していたんですが、その中で非常に印象に残ったのは、会津に住んでるけれども全く浜通りのほうに来たことがなかったと。その若者の言葉を言うにあたって学校で来たんだと思いますけれどもその3人が大熊町の大野駅周辺を歩いたと言うんですね。こういうような地域になっているところが全く想像もしてなかったと。ここが賑やかな商店街だったのが今は大野駅周辺は全部解体されてほとんど建物もなくなっちゃってますけれども、そういった賑やかだったところがこのような姿になったことを思うと本当にここに住んでいた方々、あるいは商売を営まれていた方々がどんな苦しい思いをしてきたこの12年間過ごしてきたのかっていうようなことをおっしゃってたんですね。

伝承館のこれまでの活動に関するご報告いただきましたけど、もちろん国際化対応ですとかあるいは出前とか出張行っていろんなことをやるっていうことも大切なんですけれども、やっぱり伝承っていうことを考えると何よりも私は福島の子ども、時代を担う福島の子どもたちがぜひこの伝承館あるいはその周辺の地域に来ていただいて体験とか経験していただくっていうことが何より大切だというふうに思ったものです。ですからあれもこれもっていうと特に伝承館は注目されておりますので、いろんなことをやるのもいいんですが、ぜひこれまでも学校と連携していただいてやるっていうことは十分伝わってきたんですが、これまで以上に場合によっては他の事業をスクラップしてでもそこに重点を置いて、例えばちょっと話が長くなったので恐縮ですが、私、茨城県で生まれ育ったんですが小学校5年生とか6年生だとみんな日光東照宮に行ったり修学旅行で東京に行ったりするんですけども、少なくとも県内の子どもは必ず一回はどこかのタイミングでこの浜通りの地域あるいは伝承館に来ていただくっていう、そういった例えばそれは教育委員会との連携かもしれないですが何らかの方策でそういったような仕組みを作っていただいてこの伝承っていうものに関する人材育成とか広い意味での人材育成というものを行っていただく。そういったような仕掛けないし仕組みがあればいいんじゃないかなというふうに思った次第です。

【小沢委員】

はい ありがとうございます。大変重要な教育への働きかけであります、その中での存在感のある活動ということが重要なことというふうに思います。

【前川委員】

私からも2点伺いたします。

1点目は先週3月17日にコラッセふくしまで開かれた学術研究集会を私も見学させていただきました。本当に素晴らしい会だったと思っております。福島大学の私の所属する部署全員が参加者だったり発表者だったりしたんですが、本当に素晴らしかったと思いますしおそらく大変な事業だと思いますので、来年度もし開催されるようであれば、手伝いやサポートなどができればと思っておりますのでぜひお声がけください。

2点目なんですけれども展示の方で先ほど資料3の中でも特にスペースを割いていただいております第5ゾーン「復興への挑戦」についてです。昨年度の議事録を読み返していて私このこ

とで口を切っていて、同じようにほかの委員も疑問点を提出していらしたのがすごく印象的だったんですが、伝承館全体の展示は今日も拝見しましたけれども原子力の利用という子どもの習字とか作文が非常に印象的なスペースから始まります。そこからずっと最後見て行って最後にあそこにボンとイノベ構想のあれが置かれているというのはやはり私は非常に皮肉な構図にも見えてしまう。もう考えてしまうんです。ここにイノベ構想という子どもの習字が張ってあったらどういう感覚だろう、そういうようなことを感じてしまいます。なぜなのかと言いますと結局ずっと第1ゾーンから進んでいく中で結局この震災原発事故の教訓とは一体何だったんだろうという、その教訓についてまとめて考えるゾーンがないままあそこに第5ゾーンに入ってしまうというのがやはり構造的に「教訓なき復興」というものを感じさせてしまう展示になっていると思うんです。

第5ゾーンについては展示を大きく見直されるということで大変良いことだと思いますし、すごくフレキシブルに改善をなさっているのが伝承館の強みだと思いますのでこれは私の提案ですけれども思い切った「教訓のゾーン」にする、それぞれのお立場とか一人一人の経験から震災原発事故の教訓とは何かというのはおそらく一人一人みんな違うと思うんですね。それをたくさんの県民の声、住民の声をたくさんつなげて行ってその教訓を踏まえた上での復興を私たちはしていくんだ。そういうメッセージがないとやはり「教訓なき復興」になってしまう。だからこの教訓を何か、それをみんなが考えられるようなそういうゾーンができればというふうに強く願っています。

【小沢委員】

ありがとうございます。この部分というのは非常に色々なこの間の研究専門部会の方でも色々な形で研究者の方が悩みながら研究も進めているところにも大きく関わってくるかなというふうに思っておりますけれども、このことについても後でまたちょっと時間をもしできたらと言いたいなと思います。この辺今のお二人の意見に関わっても構いませんが他にいかがでしょうか。

【鞍田委員】

私も冒頭の川崎先生のお話には大変共感いたしました、まさにそのことを今日お話ししたいと思っていたところだったわけですが、私は福島民報で論説委員をやっておりまして私含めて数年前からやはり伝承館に子どもは一回は必ず来るようにするべきだと教育旅行で必ず来るようにしないといけないというふうなことを書いてまいりました。やはり会津とか郡山に勤務しておりますと伝承館の話題はほとんど出てきません。もうほとんど原子力災害どころかその後に復興も終わったよね、というような意見を聞くこともございます。会津に行きますとやはり観光と一次産品に関しては風評という言葉使いはするんですが、会津の方が見るところというのは非常に微妙なところがありまして我々の感じる、感じ方にはちょっと違うニュアンスが違うところがあるので言いにくいところがあるんですけれども、それをおいておいても実は尾瀬、尾瀬サミットいうのを毎年、福島・新潟・群馬・栃木の4県でやっているわけですが、群馬県の例を聞いたときになるほどなと思ったのは、群馬県は義務教育の間に必ず尾瀬に登らせると。一番間近な高校の名前を尾瀬高校に改名しました。そこで環境教育の学科を設けて自然環境の研究さらに保全、

そういったものを高校生からしっかり教えるといったことを政策的にやってきています。群馬からの登山者が多いということも背景にあるんでしょうが、あまりの取組みの違いに驚いた記憶があります。

実は会津の方に行きますと学校の先生方でも尾瀬に行ったことがないという方が大勢います。以前から福島県の場合に県内の様々な地域課題であったり県全体に関わる課題についての教育界を巻き込んだ取組みがあまりにも脆弱だなということは感じていたのですが、この浜通りの現状を先ほど会津高校の生徒さんの話で引き合いに出されておっしゃられましたが、日頃から私も感じていたところでわかりますので福島県内のこれから担う子どもたちも12年前に生まれて震災経験をしていない子どもたちがまもなく中学生になってきますので、最大の課題は福島県内の次の世代を担う人たちにどのようにこの浜通りに来てもらうか、いくら学校で教えても耳から飛んではどうにもならない話でして実際に足を運んで、建物がなくなってしまった大野駅前など実際に歩いてもらう。何日間か滞在してもらう。そうすると若い子どもたちの感性に響くものが絶対あるはずですので、そういうことをぜひ伝承館として積極的に県とか県教委や学校の現場の先生方にぜひ働きかけていただきたい。そのためには教委とか各学校の先生方、校長会でも結構ですし小教研、中教研でも結構ですが、そういう教育の現場の先生方にもぜひこちらのほうに足を運んでもらう機会をさらに強化する。その先生たちがしっかり学んだ上で子どもたちを引き連れてきてもらう、という流れをぜひ作っていただきたいなど、今日はその一点だけ話せればいいのかと思ってまいりました。

【小沢委員】

ありがとうございます。それでは青木委員からお願いします。

【青木委員】

川崎先生のお話を聞いておりましたことに大賛成ですが、まず伝承館に何人入ったかという例が出ていますけれども伝承館ができる前と伝承館ができた後、この県内の小中学校の子どもたちがどれだけの浜通りに来ているかということと比べてみるとすごくよくわかると思うんです。

私は民間の伝承活動をずっとやっていてすごく悶々としていたのは県外からは震災の話聞きに来る高校生・中学生がいても県内の中高生がほとんど話を聞かないという現実がありました。でもこれが伝承館ができてこの伝承館に来るという理由は様々あると思うんです、来ればいいと思うんです。その理由がどうあれ。そこにさらに拍車をかけたのが県教委から出た語り部育成、これは大きいです。県の教育委員会が語り部育成講座で高校生も語り部育成をしましょう、そうすると各高校は手を挙げるんです。学校の姿勢がどうかという問題があるとしても挙げるんですね。そこに伝承館がある。まず伝承館に行ってその突発口として、見てみましょう聞いてみましょう、知るところから始まった高校生が今回の追悼式の素晴らしいメッセージも発表できたと思うんです。ちなみに会津高校の生徒の一人が富岡へのバスツアーで最初の一步だったというのがありますけど、あれをささやかながらうちの民間でやっていたバスを出して会津から高校生を連れてくる。未来学園の生徒と交流させる、富岡の町民と交流させるという。それが2年後にそこに載ったことがすごく嬉しかったです。新聞記事を読んだ時に。名前なんかそこに出なくても

何でもいいんです。こうやってつなげていくことが大事だと。

そういう意味で伝承館は伝承活動のキーステーションだと私は思うんです。そのキーステーションとしてキーとして何をつなげるかという若い世代の人たちと同時に今現在地域で活動している高齢者を含むシニアアダルトの語り部さんたちのスキルアップも図れるような、若者は若者だけでは育ちませんから、若者の伝承活動をする人が育つためにはそれを受け入れそれを手を引っ張っていく、先輩がいなくても、モデルがいなくても。そういう意味では伝承館は人のキーステーションにもなるそういう伝承活動のキーステーションにもなる。そこをしっかりとやっていければ私が福島伝承活動というのはつながっていけるかなと思っていますところなんです。

【小沢委員】

ありがとうございます。いろいろな形で若い人とのつながりを含めて伝承館の存在意味と申しますか、キーステーションの意味も非常に重要だということをご指摘いただいたと思います。

【丹野委員】

ただいまの参加者のお話を聞いて思うんですが、県教育委員会で今進めている語り部事業の今年度の状況を少しご紹介したいと思います。

一つは県立学校で実践校というものを設けています。今年度は23校の高等学校が実践校として指定されています。実践校は何をやるかという伝承館への研修はもちろんなんですが、それに加えて震災と復興を未来にするための探求学習・探求活動をするんですね。そして探求活動を元に県外に遠征して県外の方に福島の震災の状況と復興の状況を伝えてくるということをやっています。

今年度は例えばですけども明大付属の八王子中学高校と磐城高校が交流したり、京都工科高校とあさか開成高校が交流したりとか、こういった高校生が関西とか関東、熊本などの高校と交流を進めています。実践校7校が1都2府7県の高校との交流を実施しました。

また会津高校は台湾の学校とのオンライン交流で伝えて語りをやったと聞いています。

このような事業によって、もう少しどんなことをやっているか詳しく話したいのですが、実は伝承館だけで子どもたちの学習は終わらないとお伝えしようと思って少し話したいと思います。

例えば田島高校の生徒は語り部事業に参加したようですが伝承館での見学とフィールドワークをまず取り組みました。その体験をもとに今度は博物館の学芸員の話聞きに行きました。震災・復興に関する知識を深めてそれをもとに首都圏に向かって交流活動に参加して東京都の高校とか東京の足立区の中学校の生徒に対してこれまでに見つけた知識や技能を踏まえて発表を行って、さらに関東大震災と東日本大震災の比較に関して意見交換をして江戸東京博物館学芸員による関東大震災による講話を聞いてきました。こうして伝承館から出発していろんな施設やあるいはいろんな人と出会いながら探究学習を深めていくとそういった活動をしています。伝承館の学習がここで終わらずにいろんなところに広がっていく、そういうきっかけになっているんだなと感じています。

一方先ほどの語り部事業の話に戻るんですが、その他に約30校を指定して伝承館に見学に来るという予算を組んでいます。最後になりますが教員研修のお話をうけましたが、小中学校の教員

100名、高校教員50名、特に高校教員については教員初任者は全員この伝承館に来させて研修をするということをやってきました。そのため、教員に対しての啓発は非常に重要ですので今後とも継続してまいりたいと考えております。

【小沢委員】

伝承館のそこから始まる学びというか、そういうところをご紹介いただいたと思います。いろいろな仕掛けづくりもされておりますのでこういうようなところとのタイアップは非常に重要だと思います。

【守岡委員】

ご質問です。一つは資料の中身なんですけれども、資料2では教育旅行で県内の学校が6割というデータなんですけれども、資料4の方は、これは一般の方も含めてなんですけれども、県内の方が7割となっていました。具体的に伝承館に入館なされる方というのは県内の方が多いのか、県外の方が多いのか、どちらの資料で見たほうがいいのかという点。

もう一つ確認なんですけれども、インバウンドの方で外国人の方はどのぐらい入られているのか、というようなデータがおありでしたら教えていただきたい。と言いますのもホープツーリズム、前川先生のおかげで規模も大きくなっておりますけれども、来年度以降、もっとこちらとタイアップしていきたいと思っているので、そのデータとさせていただければと思っているところです。

それと今後のことについてですが、先日台湾の方に行ってきたんですけれども、やはり本県でこのように復興している姿、あのひどい状況から今福島県が頑張っている、そこを皆さんに共感をいただいて、ぜひとも福島県に行きたいという協力関係者の発言があり本当にありがたかったです。そういう意味で、その拠点たる伝承館がですね、こちらの資料2にもあるとおり、教訓と復興に向かう福島の今の姿を発信するため、前川先生のアドバイスのもとにぜひとも良い見せ方をしていただきたいなと思っています。

それを期待して来館していただいた方はですね、本県の復興を感じていただいて福島をまた好きになっていただく、そういったところにもつながっていくのかなと思っていますので、見せ方のところで、やはり前段分と後段分のつながりのやり方ですね、こういった形で、こういったことを教訓として例えばこういったことを変えるとか、様々な計画を受けてイノベがありましたとかですね、そのところをぜひとも説明していただけるとますます良くなっていくのかなと思いますので、よろしく願いいたします。

【小沢委員】

ありがとうございます。

先ほどの確認のところがまずありましたけれども、その部分について事務局から。

【佐藤部長】

今ほどのデータの確認について、県内と県外のところなんですけれども、資料4というのが一

般の来館者の方のアンケートになります。一般の来館者については7割が県外で、県外の方が多いという状況です。一方、団体の方については、団体の中では学校が多いんですが、学校ですと6割が県内ということで、団体と一般で県内県外の傾向がちょっと違う状況です。

もう一つインバウンドの関係、11月ぐらいから外国人の個人のお客様が増えてきていまして、受付で目視でカウントしていこうということにしまして、12月からカウントしていますが、大体月に150から250ぐらい、ちょっとばらつきはあるんですが、月に200人前後の外国人の方がいらっしゃる状況です。データの的にはこのような形でございます。

【小沢委員】

はい、いろいろな復興や防災ですとか、そういう学ぶというものを求めている人がかなりいらっしゃるって、先ほどの一般の方は県外が多いというこういう傾向もですね、ちょっと注視しなければいけないかなというふうに思います。

【大場委員】

私の方からちょっと思ったのが3点ほどありまして、まず、運営とか情報というところで2点あります。

1点目が先ほどの高校生とかというところの教育というところで充実を図っていけばいいということが出てきてきたと思うんですが、やはり高校生とか若い世代ってSNSを多く使っていくかと思うんですが、今ちょっとお話をざっとSNSとか見ていくと広告だったりとか、これこれこういうことをしました、こういうことがあります、というふうに書いてあることはたくさん見受けられるんですけど、語りかけるような投稿だったりとか例えばこれだけ資料があるのであればこの資料を使って何か刺さるような投稿をしたりとかさらにこの伝承館を通して地域についての投稿というところも、もっと広告とか情報発信だけじゃなくてしていく方が受け取り側としても行ってみようかな、というふうになるのではないかなというふうに思いました。

もう一点目が、最後の方にいわきFCと連携して集客を図っていくというふうにあったと思うんですけど、スポーツを観戦してきた方をどう復興とつなげていくのかなというところで具体的に何か決まっていることがあれば知りたいなというふうに思いました。

最後3点目なんですけど、情報の収集についてになります。公民館で活動しているんですけど公民館の方にもこの残しておきたい記憶っていうことでチラシはあるんですが、やはりくださいとって紙、媒体で置いていかれたとしても、そこに応募するという勇気が結構いるなというふうに思って、話したくない人とかそういった方とかも結構たくさんまだいると思うので集めていますというだけではなくて伝承館側から取りに行くとか聞き出すということの活動にも目を向ける必要があるのではないかなというふうに思いました。

【小沢委員】

ありがとうございます。私、SNSあまりやったことがないんですけどよくハッシュタグをつけますよね。これ館としては推奨されるハッシュタグ、例えば（ハッシュタグ）「#震災伝承館」というようなのはどこかに貼ってあったりするんですか。

【後藤副館長】

貼ってあります。ハッシュタグは#東日本大震災、あと#伝承館、その辺でヒットするようになっていきます。

【小沢委員】

大場さんも調べてみるときはそういうタグで調べるのですか。

【大場委員】

タグで調べる、情報を取る場合はピンポイントで調べていたりしますが、やっぱりタグの使い方が結構重要だったりしますので、特定のタグをずっと続けていくことに効果があったりとか、タグを毎回変えてしまうとちょっと違いがあったりとか、そういう使い方をすることもあったりします。やっぱりもっと来た人から情報を発信する場合だと館内にタグが少ないなというのも思いましたし、SNS、Twitter、Facebook やってますという情報も少ないなと思いました。

【小沢委員】

効果的にハッシュタグを使うと情報収集も楽になるんですか。

【大場委員】

楽ですし、ヒットの検索その他のワードとつながりやすくなったりいろいろ効果的なことがあったりするので、一つだけではなくて固定のものをずっと使い続けたりとか。

【小沢委員】

そういう意味でも今伝承館の数がすごいから、福島伝承館というところでピンポイントで検索されるような感じにならないといけませんね。

【大場委員】

何か特定の伝承館ならではのタグというのが一つポイントあるとタグ使っている形ができる形になるかなと思います。

【小沢委員】

小野さんいかがですか。

【小野委員】

先生方のおっしゃることごもっともで、それらができるように頑張っていたきたいなということと、この1年間の活動を拝見しているかぎり本当に素晴らしい中身で感服いたします。

感想めいたことを2つほど意見を述べますが、子どもたちが見学に来るときに県内の子どもたちはあまり近いので学校サイドも1日コースぐらいの話になってしまうと思うんですが、そうな

るとどうしてもこの見学に時間を取られていっぱいいっぱいになってしまうし、それ以上のことを詰め込もうとすると子どもたちは頭いっぱいになるので、僕らとしては先生がおっしゃるよりもっとフィールドに出た実際の地域を足で歩いて地域の方と触れて話をしてみるという時間が重要なのだろうと思うので、そのための効率的な見学をどうするかというのは県内の視察行動学習の話をいろいろ聞いていると事前学習をかなりしっかり積んできているんですね。そこで何が聞きたいか自分たちでしっかり学んだ後に来て確認してフィールドに出るというような形をしているようなので、その事前学習にどこまで伝承館ができるかというのも今後の課題だと思っています。

それから感想です。報道の立場から1つ。

報道機関が全国からいろいろ来てくれています。ここも来てくれているところもあるんですけど、まとまって団体で来てしまうと結構原発を見たいというので廃炉資料館で済ませてしまって、ここまでなかなか足が伸びなくて先日も団体が来てご案内したときも時間が余っているのにこっちは足が伸びないという話があったんですよ。せっかく全国に福島を発信してくれるところがここを見ないでどうするのというのが1つあったので、そこをうまく廃炉資料館だけじゃなくてこっちにも目を向けてもらう。報道でどうしても伝承館の中そのものとかどうなっているかみたいなのはちょっと関心が薄いところがあるので、そこをどういうふうにアピールしていくかということがあります。個人的に皆さん取材で来た報道関係者が大体同じことを言うのは、じゃあ福島の教訓とは何かという形を見ても分からないで入っていく方が多くて、僕らもなかなかそこはいろいろありうると思いますよという説明が難しいところですけども、そこをどう伝えていくか、研究をしていただければと思います。逆に言うとフィールドに立っていただければいいんですけど実は福島の今の復興状況なりグラデーションというようなところがありますけど、そこを一箇所で一望できる場所ってないんですね。福島の今はこうなんですよという説明をしてくれる場所は実は公的にはないので、それを何かの形で伝承館になってもらうのが一番いいのかなとも思っています。

【小沢委員】

ありがとうございます。

皆さんからいろいろご発言をいただいていますけれども、やはり一番重要なところといえますか、今日のテーマが大体そこに皆さん一つ起点を置いているような感じになりますのは、やはりこの12年経ったところで防災とか減災それから複合災害からの復興というようなところになった時に「学ぶべきものは何なのか」というところ、でも研究の仕掛けが動き出したばかりですのでそんなに急がなくてはいいい、急がなくてというか早急な結果を出さなくてもいいんじゃないかなというふうに思いますが、その辺のところをしっかりとすり合わせていく。みんなで何か考えるべきことがあってここまでは言えるねとか、こういうことは学んだよねというものはつきりしながら打ち出していくのは必要かなというふうには思いました。

特に福島県沖の地震はこれまでは30年に一度は必ず起きるといふに言っていてもう地殻変動がありますので30年かどうかは分かりませんが、あと18年以内ぐらいにはまた同じようなマグニチュード9クラスは来ないと思いますけれども、震度5、6ぐらいのレベルが来そうな気

がします。その時にこの伝承館としての役割って何だったのって我々は何か学んだのっていうことは必ず問われるような気がします。

ちょっと時間が限られていて短いコメントで構いませんので、皆さんの意見を聞いたところ、それから足りなかったところなど一言ずつコメントいただければと思います。

【前川委員】

先日、語り部ネットワーク会議、青木委員が会長の会議に私も出席して、語り部育成プロジェクトについて議論になったんですが、ある語り部の方から、風評の払拭っていうのは語り部の仕事なんですか？っていうことを聞いていただいて、これとても大切なポイントだなと思ったんですね。本来違うんですよ。風評の払拭とか福島の魅力の発信って語り部の仕事ではないんです。語り部の仕事はやはり教訓をしっかり伝えること。ところがその教訓を伝えることがですね、聞く人によっては風評を固定化させてしまうんじゃないかみたいな、そういうような受け取られ方がされるっていうところに正直他の県とは違う福島の難しさがあるんだと思います。私の個人的意見としては風評の払拭とか魅力の伝達っていうのはそれはもう別の機会に行うべきで、やはり語り部さんであったりあるいは伝承館はきちっと教訓を伝えること、それに特化する、それを自由にですね、いろんな方がご自身の経験に基づいて発信するのが今、小沢先生がおっしゃった教訓を伝えていくことにつながるかなというふうに考えています。

【丹野委員】

教訓としては震災等の事故以降ですね、様々な対立や分断を乗り越えてきた福島県民の歩み、その事実をしっかり伝えるというのが大事だと思います。そこからどういう教訓を受け取るかというのは人それぞれなのかなと。対立や分断を乗り越えられなかった歴史もありますし、失敗した歴史も含めてそれをファクトをしっかり使うことが重要なのかなと思います。

その際に最近思っているのは高校生の活動を見ていてどこかで SNS か何かで聞いたことをさも聞いたかのように人に発信する傾向がよくあるんです。例えば県外で放射線でいじめられたという人が来ましたとか。それ誰から聞いたの？という大抵聞いていないんですよ。そういう情報があり、それはどうなのかなと思うんですね。もっと事実をですね、一次情報をしっかりと残してそれを子どもたちに伝えてさっき申し上げたような対立や分断を乗り越えた、あるいは乗り越えられなかった県民の歩み、これを伝えることでそれからどういう教訓を目指すかがまた一つの問題になるのかなと思います。

【鞍田委員】

やはり原子力災害につきるのかなと思う。今12年経ってこういう様々な課題を日々生みつつあるというのはやっぱり原子力災害だったからにつきるんだろうというふうに思います。やっぱり原子力災害というのは一度起きるともう取り返しがつかない。復興のあり方をめぐっても元に戻すのかそれじゃダメなんだとかですね、いろんな議論百出してなかなかまとまらない。その渦中にもまれているのが我々なんだという認識からまたスタートしないといけないのかなというのと、やはりこれは人間というのは忘れる動物なんだなということなんです。

【大場委員】

やはり震災当時ここで福島で何があったかということと本当にどんなことがあってどんな人がいてどんなふうにこの震災乗り越えてというところを伝えられるのがこの伝承館の一番やっていくべきことだなと思っていて、そこから本当に人それぞれ何を感じてどういうふうに答えてそれをどう自分の今後の知識としてつなげていくかということまでアプローチできるようにしていくのが務めなのかなと思いました。当時何があったかというのを伝えていくということと伝え続けることがすごく大事なことなんじゃないかなというふうに思いました。

【小野委員】

局面ごとでいろんな教訓があったと思うんですが、先日潮風トレイルのイベントがあったときにコースが相馬の海岸に出たので、そこ歩いてて何かあったらどうするのって話をしたら、専門家の方々は入れたくなかったが地元の人たちが入れてと言ったのでコースに入れたって話をしていました。津波の教訓を言ってもらう方も実践で入ってくる場所なので、じゃあなんでそういう選択をするのかということをしかり議論すればいいというのを感じた次第です。震災の最初の教訓というのはそういうところから出てくるでしょうし、その次に出てくるのは原発の災害になったときに通常の津波地震災害とは違ういろいろな局面があったというところをどう乗り切ったとかどうしましたかというところが教訓がいっぱいあったでしょうし、それが数年たった段階で賠償が始まった段階であれほど分断を生んだ賠償ってなんだったのかというような教訓も出てくるだろうし。いろんな意味があるので、その局面ごとで決してきれいごとで終わらせない、人間の持ついろいろなところが無意識に出てくる場所をしっかりと教訓として把握しながら見ていきたいなと思っています。

【守岡委員】

県の職員で震災の対応に除染から災害対策本部から復興など様々な部分をやらさせていただいて、その経験から話しますと、やはり若い人やいろんなお立場の方がそれぞれのお立場で一生懸命一杯やってきたというのは事実だと思うし、福島県の県民の誇りだと私は思っています。

それぞれの価値観があってしかるべきだし、それをとやかく言う基準というものもこれはなかなか難しいとは思っています。前川先生の前でちょっと言うのもお恥ずかしいですけども、ホープツーリズム、これが今好評を得ているというのは見て聞いてというツーリズム、そこから先に見て聞いたものを自分事として考え今後の将来を活かしていくんだ、という考える部分が加わってまた好評を得ている。教育界の方も最近一般の方も来ていただいているのは、これが要因であるかと思っております。

そこから言いますと、様々な方々が一生懸命それぞれの考え方でやっているもので、私は今の時点では難しいのかなと思っていますが、客観的な事象とかそれぞれこういったことはこういうふうに思っていたとか、こういう対応したとか、正確な情報を伝承館の方で発信していただいて、それを踏まえてあなたはどういうふうに思いますか、と自分事として捉え、考え、そういう場面設定を作っていただく、そういう仕掛けはどうかと思っています。

【青木委員】

私はいわゆる運営に関する有識者という立場よりは、実際にここで一般研修を受け持たせていただいている語り部のプレイヤーとしての発言になってしまうかもしれないことをお断りしますが、語り手は防災のためとか減災のためとか福島の魅力を発信するためとか何々のために語るということに関してはそういう姿勢は持ちたくないとか持たないと思います。

やはり自分自身が体験したことであったり、今現実にその復興途中の被災地に住んで思うこと考えることそういうことを発信する。委員の方もおっしゃっていましたが、それを聞いた人がそれで自分の防災や減災に役立てようとかそういうふうに思う、あるいは福島ってすごい大きな災害にあったけどこんなに一生懸命生きている人がいるじゃないとか、あと人が全然入ってこないようなところだけある意味まちがゼロから作れるじゃないとか、そういうところに魅力を感じる人がいる。それは受け止めた方の結果で、それを提供するのが伝承館だと思っているんです。

だから一般研修の時は、私の目的は私と一緒に考えてくれる仲間を増やすこと、仲間になるためには知ってもらわなきゃいけないから話すけど、それを聞いた時に一緒に考えてくれない、まだ答えが見つからないんだよ、その部分がすごく大きな部分だと思っています。これ全然筋に外れるかもしれないけど、ものすごく現実的なことで2つお願いしたいことがあります。

一つは一般研修の時間なんですけど40分という時間で聞いてくれている人との対話が全然できないんです。話すと一方だけで終わっちゃってしかも時間超過の常習犯で申し訳ないんですが、40分の時間設定をちょっと考えていただきたい。

もう一つ、オープニングがカラーになりましたが、字幕をつけてください。これは前からお願いしているんですが、今のままでは聴覚の障がい者はわかりません。誰一人取り残さないといっている世の中で字幕がつかないということは大きな一つの情報提供としては欠けているかなと思うんです。現実には昨年ですと大阪のろうあ学校の子どもが来ました。字幕がありません。手話通訳者を県の聴覚障害者協会に頼みました。でもその手話通訳者が中に入るときも入場料が必要だったんですね。そういう情報提供のあり方というのはやっぱり考えた方がいい。このアンケートの16番にも字幕がない、言語対応がないってありますけども、そこはやっぱり意味あるものとして必要かなと思っています。

【川崎委員】

原子力災害というのは我が国ほとんど経験がなかったことでありますけれども、原子力災害の特徴はどこにあるか。少なくとも3点挙げられるかなというふうに私は思っています。

1つ目は原因者がいること、2つ目は避難と被害が広域にわたること、3つ目が被害が広域で長期にわたること、少なくともこの3点挙げられるかなと思っています。この3点は自然災害とも大きく異なる観点、特徴だというふうに思っているんですが、我が国これまで福島の3.11が起きてから原子力災害からの復興に向けて行ってきたのは、実は大きく異なる特質があるにも関わらず、約半世紀ほど前に確立された自然災害からの復興をベースとする復興政策が行われてきたのだろうというふうに思っています。それは一言で言うとインフラの復旧再生を空間の整備を行っ

ていけば経済成長を背景としたある種自然と生活再建が行われていくというようなスキームがあってほぼそのまま延長された。若干違うのは賠償が行われたり除染が行われたりという違いがあったんだろうというふうに思っています。

そういった意味で原子力災害からの復興に向けては特質が違うとは分かりながらも特質が異なりながらも過去のツールを何か当てはめて正解が見えない中でみんなが一生懸命やってきたそんな12年間だったんじゃないかなというふうに思っています。今思うのは原子力災害、原発事故そのものについて皆さんご存知のとおり原発事故が起きた直後に4つの公的な委員会が立ち上げられまして調査検証が行われたということになっています。

しかしながら原子力災害からの復興に関しては今なお少なくとも公的な機関によってはごく一部の例外を除いて調査検証というのが行われていないのだと思うんですね。そういった意味で先ほど前川先生がお話ししていただいたような教訓というものはどこまでちゃんときちんと国民間で共有できているかということはずごく怪しいことだし、逆の言い方をするといろんな捉え方もできるような状況になっていて、まさに伝承するという意味では非常に伝承館が大きな役割を果たすのではないかと。そういった意味でこれまで福島原発事故が起きてから原子力災害対策特別措置法の改正が行われてきたり、新指針が出てきたりして様々な防災・減災も取られています、本当に福島の復興という実態に即したものになっているのか、そういったものの検証ができるというのは実は福島において他にないのではないかとといったことを私は思っています。

その中でその検証を行う核というものが一つそれは伝承館の取組そのものなのか県なのか国なのかというものがありますが、伝承館が非常に大きな役割になってしかるべきだろうというふうには思っていますので、ぜひ教訓ということ、防災・減災も含めて今後研究活動も一緒に進むと思いますので、そういったことも念頭に置きながら研究を進めることになるのではないかと思います。

【小沢委員】

まとめとしていい意見をいただきました。ありがとうございます。

今いろいろなことでまとめとしての知識といいますか、今の時点でやはり我々としてはっきりしているのは、これまでの過程の経験ということはこれは確実にいろいろな方に提供できる情報としてあるのかなと。それから先というものはこの間の研究部会の方でも思ったんですけども、研究者の方が先ほどの川崎先生の指摘にもありますように分析しているところがないので、それを提示することができないというのは今の時点での伝承館のまだちょっと弱みといいますか、これからの課題なのかなというふうには思います。

自然災害であれば自然の摂理で繰り返し起こって、それに対して防災・減災が考えられる事前防災なんていう言葉を使う学会もありますけれども、そういうようなものを作って南海トラフやいろいろなところでも発災、何か起きたときというふうになるだけけれども、我々が経験した複合災害的な事前防災というところにはまだ至っていないのではないかなというふうに思います。

そういう事が起こったらシミュレーションの段階をもっともっと上げないとなかなか人工物の災害というものは予見できないからだと思っているのですけれども。

そういう課題がありつつ現時点での取組をしっかりと伝える、また復興との関わりということ

についても皆さん方の意見の中に解があるような気がいたしますので、ぜひこういうことをまたさらにこの懇談会の場で議論を進めていけたらなというふうに思っておりますし、事務局の方にも建設的なご意見をいただければというふうに思います。

ちょっと時間が超過してしまいましたすみません。ちょっと重要な内容だというふうに考えましたのでこの12年間を振り返る意味での防災、伝承館としての発信する仕事ということを改めてご意見を申し上げた次第です。それでは事務局の方からあればお願いします。

【副館長】

まず大場委員から質問があった、いわき FC との連携、スポーツとの関係についてですが、いわき FC がご存じのとおり J 2 に昇格し、全国から多くのサポーターがこれからいわき、福島県を訪れると予想されます。遠くから来た方は前泊したり後泊したりされると思いますので、滞在期間中に伝承館の方にもご来館いただき、福島の現状を知っていただきたいというような形を考えておるところです。

これまで当館の運営全般において貴重なご意見ありがとうございました。伝承館の開館以来、教訓は何だとお客様からもたびたび聞かれるので、我々スタッフとしても非常に悩ましいところではあるのですが、伝承館の役割としては事実を分かりやすく伝える、あとタイムリーに伝えるということでこれまで取り組んできたところです。例えば今年度は特定復興再生拠点の避難指示が解除された3町村についてエントランスでパネル展を行うなど、タイムラグなくわかりやすい展示で情報提供をできるように努めてきたところです。

ご指摘のあった教訓についての展示などについても、今後研究員の活動なども活発化する中で研究の展示への反映なども含めて考えていきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

【小沢委員】

ありがとうございました。皆様からいろいろな意見をいただいて伝承館の位置づけがさらに高まったというふうに思います。ただ課題もございまして、ぜひこれからも皆様のご支援を伝承館に寄せていただいて伝承館の位置づけがさらに確固としたものになるように取り組んでいただきたいというふうに思っているところです。それでは今日の議事は以上で終了させていただきます。